

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

親の背中

稲荷正明

いな り まさ あき  
稲 荷 正 明 さん

**[略 歴]**

年 齢 79歳  
住 所 北海道網走郡大空町  
経 歴 昭和10年1月権太（現サハリン）生まれ  
北海道学芸大学（現教育大学）旭川校二年修了  
日本大学文理学部 三年編入卒業  
道内小・中・高校勤務後、平成7年3月道南森高校校長で定年退職  
平成14年～7年間、女満別町社会福祉協議会 事務局長、その後囑託  
として地域福祉に携わる。

**[応募動機及びコメント]**

教育困難校といわれた各高校で、軌道を外れた生徒を指導してきたことを自分なりにまとめてみたかった。

近年、生徒の指導の仕方もわからず右往左往する教師が多くなった。指針の一助になればと思っている。

子どもの成長度合いは家庭や親の姿勢にある。その親へのアプローチの仕方と自分の経験を通して、教師集団やP T Aに提示する。

## 〔梗概〕

三十八年間の教職人生において、腐心してきたのは学習指導よりも、むしろ生徒指導である。

とりわけ問題を起こした高校生とその背後にある家庭（親）との矯正活動は、日々苦しみと戸惑いの連続であった。

根気を持つての攻めの闘いである。

その中で得た教訓の一つは、子どもよりも親の姿勢を変えなければ、なかなか解決に至らないということである。

子どもは生まれた時から親の背をみて、知らず知らずのうちにその影響を受け（良し悪しにつけ）、かつ親の性行を身につけるものだから。

それで子どもとともに親の生き方も改善させるため挑戦してきた活動を視点にして、私自身及び同僚と取り組んできたささやかな実践を記してみる。

内容を次の様な章だてにした。

一、親の背をみて子は育つ

(1) 問題行動をとらない子の家庭

(2) 歪む子の家庭

二、非行生徒の親子への指導

(1) 「モデル家庭」のビデオ視聴

(2) 特別指導中での進路指導

(3) 共に食事をする

(4) 生徒の言い分を徹底的に聴く

(5) 保護者への指導

①親の働く姿をみせる

②基本的な生活習慣の体得を促す

生徒の単独非行よりもグループによる問題行動をとる方が断

然多い。

ヨワな子どもも群れる事によって大胆になる。

群れを見逃しているより大きな事件を起こしかねない。そのグループ解体にも苦勞してきた。その取り組みの展開も記述した。

三、グループ帰属意識の瓦解を目指す。

四、結び

親は己の生き様を真摯に子に示せ。

一、親の背をみて子は育つ

標題は、子どもの教育を語る時、よく引き合いに出されるフレーズである。

子育てをする上での至言であろう。

私は三十八年の教職歴を持つ。偶然にも小・中学校を各十年。高校十八年と、いわば青少年期の発達段階を踏んだ年代とともに教育に携わってきた。

それだけに、他教師よりは、多様な子弟やその保護者と接してきた。またその家庭に入り込んでの指導経験は豊富だと自負している。

その経験をもとに、子どもの育て方について考察し実践してきた活動を述べてみたい。

(1) 問題行動をとらない子

両親が円満な人柄で、和やかな家庭生活を営んでいる家の子弟は、お

しなべて問題行動をとったり、非行を起こさない。

これは誰しもが認識している事である。

特に父親が温厚でいながら、かつ時には厳格な態度に出る人物であれば、最も理想である。そういう父親であれば、子は信頼し、常に父に自分の心身を委ねる。親子の対話が常に持たれる家庭。スポーツでも他の趣味にでも子どもが取り組むものへ理解を示す親。中には親子で剣道や卓球など趣味を共通する家庭も少なくない。

母親は綺麗好きで、口やかましくない人物が、子どもに良い影響を与える。すなわち子どもはそんな親の背中、つまり人物や行動にふれて、知らず知らず薫陶を受けているのだ。いわば両親の像に近づいていく成長をとげているのだと確信する。こんな家庭では、きわだった問題行動や非行に走るような子どもは出てこない。

## (2) 歪む子どもの家庭

問題行動を犯した子ども宅へ訪問すると、まず驚くのは、家の中の乱雑さである。

各部屋の整理整頓（例えば子ども部屋へ入ってみても）はできていない。部屋中、物の使い捨てで、散らかし放題なのがほとんど。

甚だしいのは、茶の間にインスタント食品の空きカップやトレイ類、はてはペットボトルが座る場所もない程、散乱している。

これは、とりもなおさず母親のだらしないさによるものだろう。

そういう母親は家事を放置して、外出時には、我が身を着飾って、他人の前では平気でキレイ事を並べる手合いが多い。

たしなめる私に母親は決まって言う。「忙しくて、家の事をする暇がない」と。

子どもの非行と今後の対処の話し合いを進めると、両親で弁解の言葉

が跳ね返ってくる。

父親。「朝七時に働きに出かけ、帰宅はいつも七時か八時。子どもに接する機会はほとんどない。だから子どもの事は母親まかせである」と。

母親の言い分は「生活が苦しいから、日中働きに出ている。帰ればご飯支度など家事に追われるから、子どもと話し合う時間などない」と。

これでは、両親とも子ども子育て放棄をしているようなものだ。

居室の整頓もしないだらしない親に次いで多いのは、父親の暴力行為である。ちよつとの事で家族をすぐ怒鳴りつけたり、暴力をふるう父親と数多く接してきた。

そんな粗暴な父親のもとで育つ子は、いつの間にかその悪影響を受けている。

小規模高で勤務した時の経験である。悪グループのボスになって、仲間とともに校内の弱い者いじめを頻発させていた生徒の家庭に赴いた時だ。仕事を終え、茶の間に構えていた父親は、テレビのボリュームを高く上げ、その側で飲酒していた。

私が経過を説明しているのに、テレビに目を向け、ビールをぐい呑みしている。

たまりかねて私は、「息子の大事な進退の話をしにきているのに、その態度はないでしょう。まずテレビを消して下さい」とたまりかねて要求した。

「これは俺の勝手ではないか。どだい学校は…」と逆に学校や教師の非を勝手に並べたてて攻撃してきた。

小型船で湖内で漁をする一匹狼の漁師だ。

「いや、何一つ他人に悪さをするわけでもない大人しい生徒に、しかも無抵抗なのに、数人で殴る蹴るの暴行を加え、二週間治療の傷を負わせた。しかも一人だけではないのだよ」と私は少し尖がって説明する。

「昔から子どもは喧嘩するものだ。弱い者が負けるのは当たり前だ。」

喧嘩をしながら子どもは絆を持ちたり成長していくものだ。うちの〇〇だって、小さい時からどれだけ俺に打ん殴られてきたか。だから鍛えられて強くなったんだ。その弱虫にも言つてやれ。喧嘩に負けないよう鍛えろとな」

「喧嘩と一方的な暴力とは性質が違う。暴力は、相手の人権を踏みこむ犯罪ですよ」

すると父親は、私に掴みかからんばかりに身を乗り出して、私に言い放った。

「なに、うちのガキが警察に捕まるような悪をしたというのか。ただ元気が過ぎるだけでないのか。それを貴様は何という……」

「いや。人の居ない場所にグループで脅して連れ込んで、気も弱い体力的にもひ弱な一人の生徒によつてたかつて『五万円持つてこい』と金銭を要求しながら殴る蹴るの暴行は喧嘩ですか。一般社会では恐喝罪や暴行罪に匹敵する凶悪犯罪ですよ」

「息子の〇〇を始め、仲間の暴行に加わった連中も、相手に傷害を与える程の暴行に及んだ事を認め、反省している。親がそれを受け止め、対処していかなければ、被害生徒を通して警察に届け、裁判で決着をつけるより他はないですよ。」

息子の暴力犯罪が、新聞に載つたり、警察だよりで報告されたりして、世間に明らかにされてもいいのですね。むしろ裁判の結果、少年院に送られて矯正生活を何年か送られる公算が大きいですよ」私が最後の切り札を出すと父親はあわてて、

「もし、そんな事になったら、俺は町長に言いつけて、お前をこの町から追い出してやる。裁判だって、俺の力で揉み消してやるわい」とあくまで脅しの態度に出る。

「〇〇を退学にでもしてみろ。貴様を叩き殺してやる」と更に追い討ちをかけてくる。

「私に危害を加えたら、親子で二重犯罪になりますよ」私は笑いながら応ずる。

この種の親は、決して子どもの非を認め詫びて、更生させる努力をする言葉を吐かない。

こんな類の親ゆえに、非行を犯した生徒自身も一筋縄にはいかない。言い訳・言い逃れ・責任転嫁が常套。

いくら被害生徒が事実を言い張つても、認めようとはしない。決定的な動かぬ証拠を突きつけない限りだ。成人社会における犯罪者と同様である。

やはり、幼児の時から、そのような父の態度を見て育ってきたからだろう。

ましてや〇〇は、幼い時から何かにつけて父親に殴られてきた。その反動で他を殴ることに違和感を持たないのである。

この事例は特別ではない。私が接してきた非行生徒の、大方の父親像である。

母親の口からよくでるのは、兄弟姉妹との比較による差別である。

「この子は、いつもこんな悪い事に走るが、上の兄は素直で、成績も良い。この兄を見習ってくればよいのに、すぐ△△したら悪い友達に引つかかるのだから。と、当の息子を前にして優秀な兄と比べて貶す。

これでは子どもの心は硬化したままである。こんな母親のもとでは、家族はみなバラバラだ。要するに家族全体のまとまりがないのだ。子どもにしたって自分を貶す母親に対して信頼の念など起きっこない。自制がきかず自分勝手に生きようとする。

また、他人への悪口、とりわけ本人の非を棚に上げて、仲間が悪いからだと、グループの連中やその家族の事を悪し様に罵る母親が多い。明らかな責任転嫁である。

要するに両親それぞれが、家庭における役割を果たしていない。親と

しての毅然たる姿勢がないのだ。少しうがっていうと、アイディンティティが確立していない中で、家庭という形を表面的につくっているに過ぎないと判断する。

## 二、非行生徒の親子への指導

前述してきたとおり、問題生徒やその親へ、通り一遍の指導言辞や忠告を述べても、全く効果のない事は明白である。親子ともどもの矯正は容易な事ではない。これまでの生徒や親との関わりの中で、私は次のような手立てを試みてきた。

### (1)「モデル家庭」のビデオ視聴

非行の実態が明らかになって、当事者に校長から停学なり家庭謹慎が下った後、事後指導の一つとして、私は親子を視聴覚室に伴う。

警察署少年補導課や青少年健全育成協会が扱っている『円満な家庭の暮らし』を撮影したビデオやDVDを視聴させる。矯正組織が作成のビデオ等の内容は、ドラマ性はあっても何となくキレイ事すぎる。

それで私は生徒指導担当の仲間と図って、私が執筆した台本でもっとリアルな映像を見せる。内容は、別な学校での同僚の家族像をビデオに収めた。

内容は親子の口論も兄弟喧嘩もありで、多少生臭いところもあるが、とどのつまりは家族が信頼し合い、温かく暮らしていく様子を描いたものである。

この二十五分の短編ながら自前のビデオを作成してからは、専ら、これを上映している。

視写後、二、三の質問をするだけだ。感想文を書かせたり、これを元に話し合いを重ねるような事はしない。深追いをすると逆に心を閉ざしてしまう。

親子の心にどう投影されたか付度はするが、他家の家族のあり様を視て、少しは己の家族を考えてくれればとの、ささやか願望をこめての試みである。

### (2) 特別指導の中の進路指導

一般的には非行処置として一定期間の停学が多い。

停学といっても指定された期間、家庭謹慎か登校して特別教室に入り、数人の教師による指導や課題の取り組みに入る。私は特に進路指導に力を注ぐ。問題行動をとる要因の一つに、生徒自身、将来への見通しが持てない事がある。入学はしたものの、ほとんどの生徒が、将来の目標を持って学んでいない。自分で将来像を描けないせいもある。

そこで、私がまず取り組ませるのは『性格の把握』である。市販の性格検査を使ってまとめさせるが、本格的なのは、私自身が集めた二百五十あまりの性格用語からの拾い出しである。三枚にわたる性格用語の中から、父・母・自分に当てはまる用語を抽出させる。ついで社会に、そして人間関係におけるプラス要因とマイナスとなる語句を分けさせる。もちろん理解しがたい用語には、解説を付してある。

次からが生徒との勝負だ。選び出した性格語について、日頃の行動とからめて一語ずつ語らせる。その性格ゆえに、成長過程において損得した事なども。

次いで、親子に共通している性格について語らせる。語る中で私が質問したり、有名人のその性格によるエピソード等を紹介する。この性格把握作業は、本人にかなりの興味をもたらす。

しかし、これまで十数年かけて形成された性格を変えようというのは至難な事だ。しかし、これから人並みの社会人として生きていくためには、プラスの性格、例えば協調性とか誠実性などという性向は、努力すれば獲得できるものだから、自分のものにする事と励ます。ついで職業選択にかかわる学習をさせる。進路室には『公務員になるには』とか『自動車整備士になるには』などの職種の内容や資格取得の方法、学習法などが記載されている職業シリーズの本が並んでいる。そこから自分の興味・関心のある職種の本を選ばせ、メモをとりながら読ませる。

対象生徒の半分は関心を示し熱心に読み進める。中には質問攻めである生徒もいる。

『なるにはシリーズ』の他に『職業分類表』や職業紹介の冊子は幾種類もあって、関心のある生徒は深めていく。

その結果、本人が高校卒業後就きたい仕事や、その職に就く為の資格を取得するために上級学校へ進学したい希望を持てば、この指導は成功したといえる。

### (3) 共に食事をする

男子生徒の希望する職種の一つに、レストランやホテルで働く『シェフ』がある。また面談中、料理の件で話題が弾むことも多い。そこで私は、学校の特別室で課題を消化し、下校する際、我が家に誘って食事を共にする。もちろんん妻との共同作業である。

多少は子どもの好みにあわせたメニューを用意するが、ほとんどは我が家の日常の定番メニューだ。食事中、「好き嫌い」を尋ねるくらいで、余計な事は言わない。黙って食べっぷりを観察するだけだ。子どもによつては、ただ無表情に料理を口に運ぶだけの者もいる。が、大方は意外にも「おかわり」を要求するほど食欲を示す。中には「これは何ちゅう料

理なの、おばさん」と質ねる者もでる。『春雨チャプチェ』や『グラタン風白身魚煮込み』などが珍しがられる。肉じやがやポテトサラダになると、「うちのお母さんもよく作る。ただこんなに蟹の身が入らんよ」そんな感想を発する子には、すぐ応じて話題をひろげていく。子どもも夢中になって、家庭の自慢料理から、母親が働く水産加工場の事。小学生時代、友達と連れだって港の岸壁や岩場で釣りをし、鰈(カレイ)や鮎(ホッケ)をたくさん釣り上げた実績を目を輝かせて語る。

妻と二人でもてなすささやかな食事が、こんな会話を生んで、子どもの再生につながるきっかけになる事もある。

### (4) 生徒の言い分を徹底的に聴く

謹慎中の面接時間のひと時、泥棒にも三分の理ではないが、この度の犯した非行について、生徒の言い分に耳を傾ける。なかなか口を割らないが、いくつか誘導尋問をかけ、心を開かせる。自分の悪意や悪行を棚上げして相手を誹謗する不合理な内容であっても糺さず、ひたすら聴き手にまわる。胸中にあるものを吐き出すと生徒は少し心が晴れるのか、穏やかな表情をみせる事もある。その彼等の言い分を分析して、今後の指導の手だてにする場合が多い。特に別な形で人間関係が読みとれて参考になる。この方法も良い指導の手段だ。

### (5) 保護者への指導

子どもより親を矯正させる事は、言うまでもないが難しい。話し合いを重ねて、父親が態度を改めて、子も含め家族と向き合って、きちんと暮らしたという事例は、私の教職生活の中でほんの二例を持つただだ。

もちろん、その場ではなく、その後の親子の人生過程で、それぞれが自己改造を試み、家庭や親子関係を改善させたという事例が生じているかもしれない。しかし、追跡調査を確実にするわけでもないから、そんな良い情報は皆無に等しい。

そういう状況を踏まえた中で、親と向き合う項目は次のような事である。

①親の仕事、つまり職場で真剣に働いている姿を子どもに見せた事があるか。

家庭訪問をする時間帯は、家族が夕餉をすませ、父親が疲れを癒すためテレビを視ているか、晩酌を楽しんでいる時刻だ。だから、一様に嫌な顔をされる。話し合いの最中、先方が急に怒鳴ったり、恐喝まがいの言動をとることは珍しくない。

それでも私はひるまず、

「父さんは、自分の仕事の内容を子どもに教えた事がありますか。じかにみせた事がありますか」と問いかける。

「何故、そんな事をしなければならないのか」と、ほとんどの親からこの言葉が返ってくる。

「どんな仕事であれ、父親が真剣に仕事をしている姿をみれば、どんな子でも感動する。そこから親への信頼が生まれてくると信じているから」と答える。

職種にもよるが、ほとんどの子は父親の仕事の現場をみた事がないはず。親の働く姿こそ『親の背中』だと思う。ゆえにしつこく、この事を勧めるのだ。

②親子での基本的な生活習慣の体得を促す

教育現場では、生徒指導の根幹である「基本的な生活習慣の確立」を

標榜している。それがどんな内容なのか具体的におさえていない教師も少なくない。まして一般の人々にとっては、なおの事である。

大きく項立てをすると、④挨拶 ⑤礼儀 ⑥規則を守る、という事だ。特に⑥の礼儀。他人に対するエチケットは幼児期から親が躾けていかなければ、身につかない。けれど問題行動をとる生徒の家庭では、ほとんどないがしろにされている。

「そんな事、言われなくても解っている」と激怒する親も多いが、私はひるまず礼儀の中身を具体的に、そして大切さを親に向かって諄々と説く。

「礼儀をわきまえていれば、子どもは社会に受け入れられ伸びていく。礼儀とはつきつめれば他人への思いやりに他ならない。どうか親がその範を子どもに示してほしい」と懇願する。訪問の度に話題を変えながら、この問題について話し合う。

◎規則を守る。人間として社会の一員として、すべての規則を守ることは当然の事なのだ。けれど実社会において、国や社会のルールに対して、常に順法している人々は、どれだけいるだろうか。

絶え間ない犯罪の続発や反社会的な行動をとる者が後をたたないのは、世の中のきまりが守られていない証拠である。刑法とか大げさな国法に触れるという大ごとな事でなく、人との約束や集団の中のきまりをきちんと守る。これに家族一体となって徹してくればよい。そのため、常に親子でたしなめ合い、気遣いを持ってほしいと、幾度も力説して行く。

そして最後に必ず「子どもの将来を思いやるなら、どうか私の言を真剣に聴いて、親子で実行してほしい」と結んで帰宅する。



### 三、グループ帰属意識の瓦解をめざす

地域や会社等、公の組織は別として、人は何らかの集団やグループの枠に入り、そこに依拠して暮らしている者も多い。けれど狭い枠の中の社会活動では、その効用は長短をなす。

例えば暴力団。一度そこに帰属すると抜け出せないのは衆知の事実だ。同様に校内外におけるワル生徒のグループ。一旦、仲間に入れば、仮に嫌気がさして抜け出したくても、ヤクザ社会と同じように抜け出せるものではない。

日頃から不良行為に走り徒党を組んで非行を犯すグループから、脱出をはかる生徒がいれば、グループそのものを一網打尽にして瓦解させる手だてを講ずる事もできる。

ところが家庭や学校生活でも問題のない生徒が、何かのはずみでワルの仲間に取り込まれ、抜け出せないでやむなく非行を犯すケースも少なくない。根から問題生徒ではないのに、いわば巻き込まれた生徒をグループから抜け出させるのは難しい。

グループ仲間は、帰属意識が強い。それだけに抜け出そうとする者に対しての制裁は過酷である。それを知っているが故に強引に離脱させるのを避ける。だからといってグループ内の個々を離脱させるべく説得をはかっても、ほとんど効果なしだ。何せ彼らが非行に及んでも平気なのは、仲間が最後まで庇ってくれる、護ってくれるという安心感があるからだ。それゆえ彼等は親や教師よりもリーダーや仲間の言に忠実なのだ。その強い帰属意識を打破するのは困難をきわめる。そこで私達教師陣は、リーダーをターゲットにする。何か問題が発生した時、真っ先にリーダーを呼び出し、「お前が、陰でみんなを操り、動かしたな。非行の根源はお前にある」と問いつめていく。

「何故、俺にばかり目をつける。俺は何も言わないのに、奴等が勝手に

にやったんだ。それなのに俺をすぐ悪者にするのは差別ではないのか」と猛烈な反発が返ってくる。

「お前はグループのリーダーだ。グループというのは、リーダーの意思に従って動く。だからお前に訊くのだ」と前置きして、更に追い詰めていく。

「人をまとめる力があるのだから、なぜいい方に発揮しないのだ。社会や職場が求めている人物像の一つに『良きリーダー性』というのがある。お前なら、社会に出てそんなリーダーになれる。周りの者を統率していく力を備えている。ワル仲間のボスでおわっているのか」と逆に褒めあげて説き伏せにかかる。教師陣が幾ども繰り返して話すと、大半のワルも考えはじめた。

こうやってリーダーの心を変えることができれば成功だ。グループは自然と瓦解する。

しかし、すべてうまくいくとは限らない。とにかく、問題行動をとる生徒は、徒党を組みやすい。一人ひとりとは虚勢をはるだけの弱虫なのだ。だからこそ群をつくる。

私達教師陣は、常に生徒間の人間関係に注意し情報を交換しあって、把握につとめる。

まずワルの仲間に組み込まれそうな生徒を把握すれば、忠告し仲間に加わらないよう避ける手だてを与える。これも教師の重要な役目の一つである。

### 四、結び

教師歴三十八年。本務はもちろん学業指導にある。日々の授業の充実に務める事と並行して、担任クラスの児童や生徒及び家族の状況を常に

把握することにも努めてきた。

組織の中では主に生徒指導部に属し問題を起こした生徒の原因究明、その後の指導措置に奔走してきた。その為の環境の掌握と改善にも心を砕いてきた。

少しでも早く非行に走った生徒自身が、本心から目覚め人間性を回復し実社会で全うに歩んでいく事を願いつつ。

けれど、子どもの正しい成長を促す根幹は、親が自ら真剣な生き様や仕事に打ち込む姿を子どもに示しながら暮らしていくことこそ、最大の良き子育て法だと確信している。

それ故に、時には人格や人権をも否定される言動を受けながらも、問題の子の親と立ち向かってきた教職人生である。